

『待つ』をあじわうカフェ

建築計画研究室 北添智也
指導教員 木多彩子

キーワード

待つ	カフェ	動と静
五感	見守る	きっかけを待つ

1 設計背景

1-1.社会的背景— カフェ=現代のサードプレイス

近年、カフェは単なる飲食の場ではなく、第三の居場所として人々の生活に深く根付いている。このような場所においては、提供される飲食物の質だけでなく、「どのような時間を過ごせるか」という滞在の価値や体験が重視されるようになってきている。作業や会話、休息など、利用者はそれぞれ異なる目的をもってカフェを訪れ、その時間の質が空間評価に大きく影響する。

1-2.既存カフェの課題— 設計されていない「待つ時間」

一方で、多くのカフェにおいて、利用の過程で必然的に発生する「待つ時間」は、利用者が空間に滞在しているにもかかわらず、明確な居場所や行為が与えられない。「待つ」という行為が設計からこぼれ落ち、時間そのものが消費される対象となっている点に課題があると考ええる。

1-3.「待つ」の分解

そこで「待つ」を二つの視点から整理した。

一つ目は、カフェ利用に内在する待ち時間である。入店から商品が提供されるまでのプロセスの中には注文時および注文後に必ず「待つ」という行為が発生する。

二つ目は、場所によって性質が変わる「待つ」である。交通拠点や、教育施設周辺など立地によって「待つ」のあり方は大きく異なる。

2 設計の目的

本提案では、カフェ利用の中で必ず生じる「待つ」と、場所ごとに異なる「待つ」の特徴を重ねて捉え、それぞれの敷地に合った空間のあり方を考える。

そのために高知県市内の立地条件が異なる三つの敷地を対象に、それぞれ異なるカフェを計画することで、「待つ」という行為を退屈な時間から、空間体験として価値を持つものへと変える可能性を探る。

3 設計内容 A 動と静の往復—五感で待つ

3-1.敷地 A-中心市街地(高知県庁付近)

敷地 A は、路面電車と幹線道路に面する高知市中心部の角地であり、オフィスワーカーや観光客など多様な人が絶えず行き交う場所である。

この敷地では、移動や業務の合間に生じる短時間かつ断続的な「待つ」が日常的に発生しており、待つ行為は常に都市の流れや喧騒と重なっている。



図1 敷地図 A 1/500

3-2.動と静の往復と五感で待つ



図2 外からの俯瞰パース

3-3.構成-二枚の壁

二枚の大きな壁によって建物を分節し、それぞれの壁がつくる空間ごとに異なる体験が連続する構成としている。壁は空間を単に区切るものではなく、通過するたびに「動」と「静」が切り替わり、五感への刺激が変化することで、待つ時間そのものを体験として編集する装置として機能する。

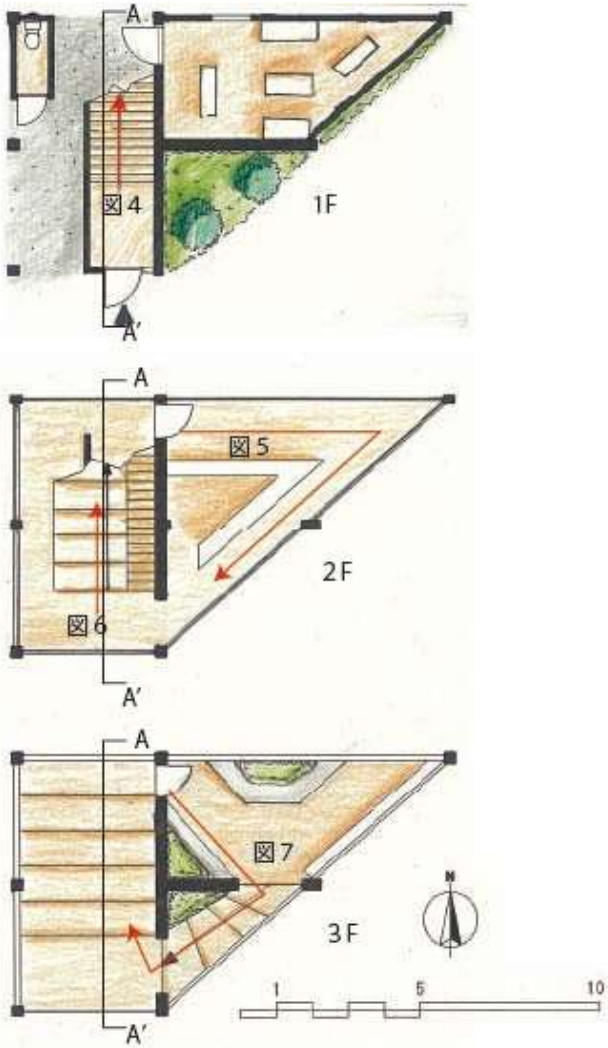


図3 平面図

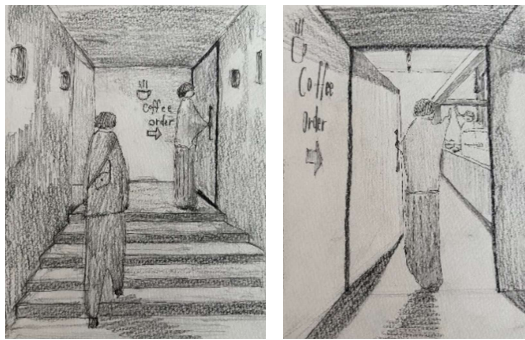


図4 1F階段「動」

登る行為から立ち止まる行為へと切り替わるこの瞬間に、空間的な緊張が解かれ、視覚を通して待ちの始まりが意識される(図4)。

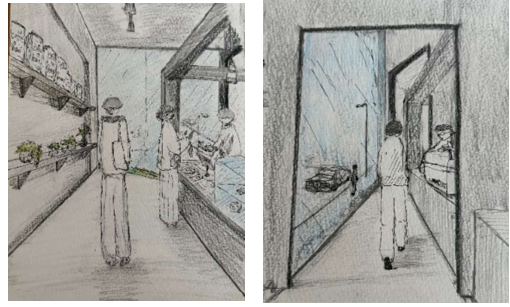


図5 注文スペース「静」と抽出スペース「動」

抽出中のコーヒーの香りが漂う空間を通過することで、嗅覚が刺激される(図5)。

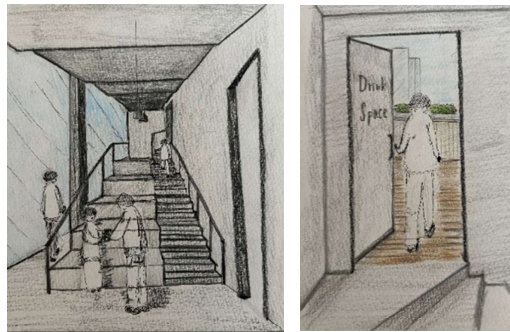


図6 受け取りスペース「静」と2F階段「動」

隣接する抽出スペースから聞こえてくるコーヒーを淹れる音や、受け取る際に伝わるカップの温かさが、聴覚や触覚を刺激し、待つ時間が感覚的に満たされていく。(図6)



図7 飲食スペース「静」と3F階段

移動する「動」から、飲食という「静」へと移行し、最終的に味覚が刺激されることで体験は完結する(図7)。

このカフェでは、壁を境に動と静が繰り返される構成とし、その都度五感の焦点が切り替わることで、体験にリズムを生み出し、待つ時間を能動的に味わう行為へと転換する。

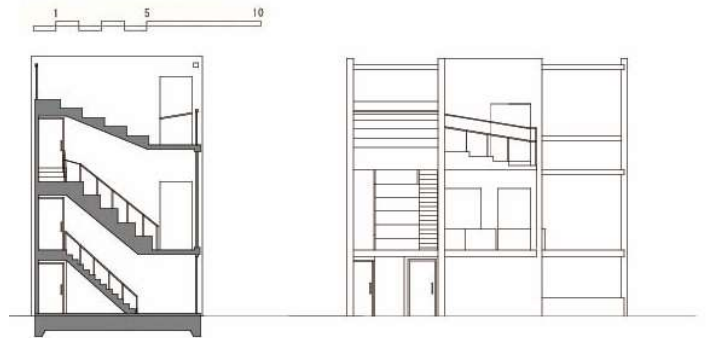


図8 AA'断面図

図9 南側立面図

4 設計内容 B 関係の出发点—きっかけを待つ

4-1.敷地 B

敷地 B は、大学・駅・路面電車が近接するエリアに位置し、学生の利用が多い場所である(図14)。

授業の空き時間や次の移動までの「待つ」が日常的に発生しており、短時間の滞在が繰り返されることが特徴である。



図10 敷地図 B 1/500

4-2.関係の出发点できっかけを待つ

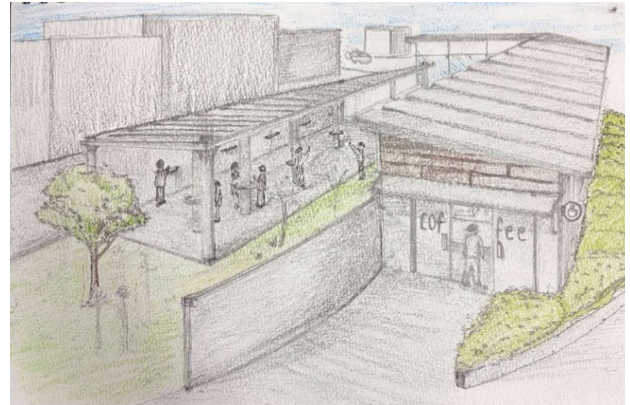


図11 外観パース

このカフェは、効率的でありながらも、偶然の出会いや会話といった体験が「待つ」時間に生まれる場となる。短時間で立ち寄り、気軽に言葉を交わし再びそれぞれの目的地へと向かう。

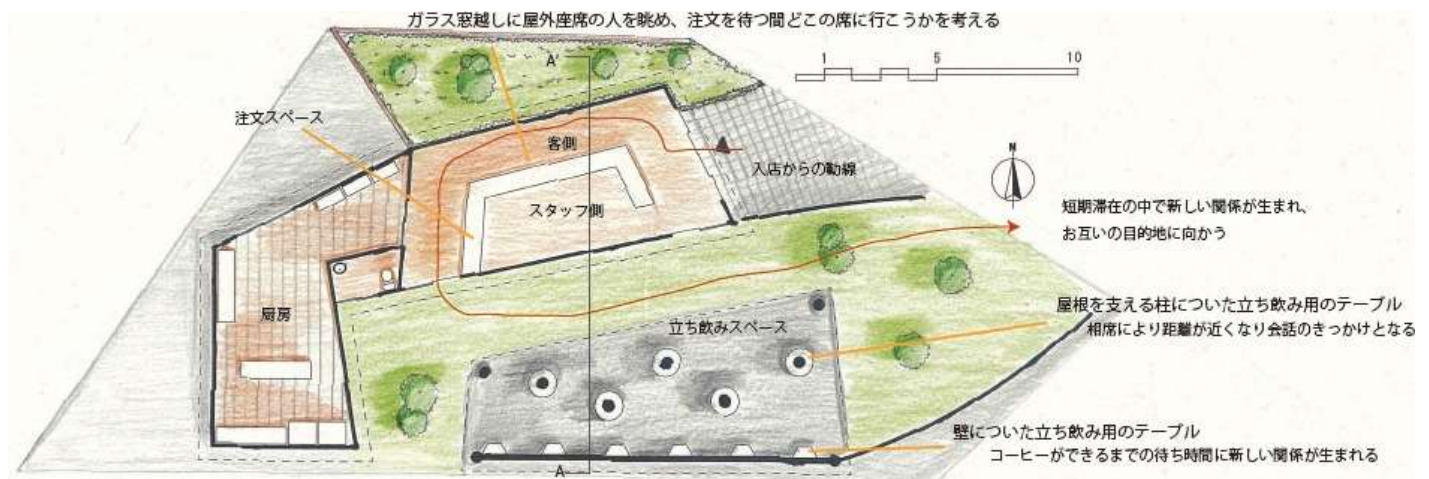


図12 平面図

4-3.構成—立ち飲み

立ち飲みは、着席型と比べて滞在時間が自然と短くなり、初対面同士であっても会話に参加しやすい形式である。

また、建屋を極力シンプルな構成とし立ち飲み形式を採用することで、建設・運営コストを抑え、時間的・経済的効率を重視した場を目指す。

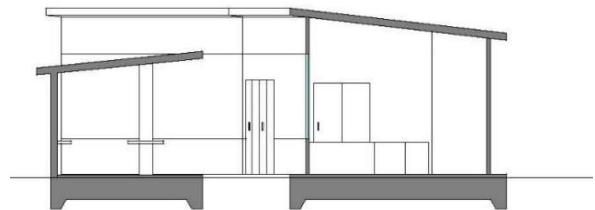


図13 断面図

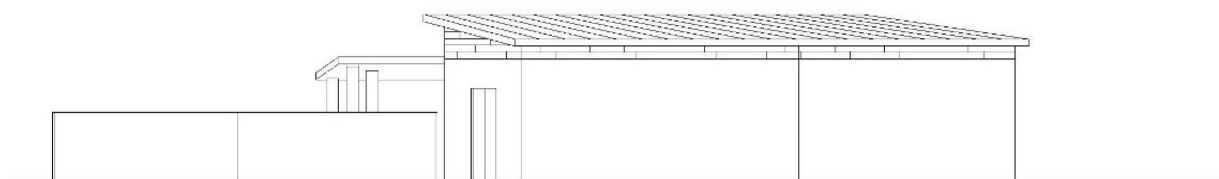


図14 北側立面図

5 設計内容 C 犬と子供一見守る待つ

5-1.敷地 C

敷地 C は、住宅地および秦中央保育園に隣接するエリアに位置し、周辺には犬の散歩コースがあり、歩行者がゆっくりと通過・滞留する風景が見られる(図15)。

このカフェではその待ち時間を退屈や焦りではなく、誰かを見守る穏やかな時間へと変換することをテーマとする。



図 15 敷地図 B 1/500

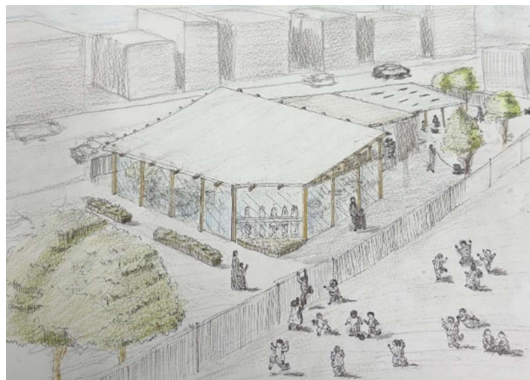


図 16 全体パース

5-2.犬と子供と見守る待つ

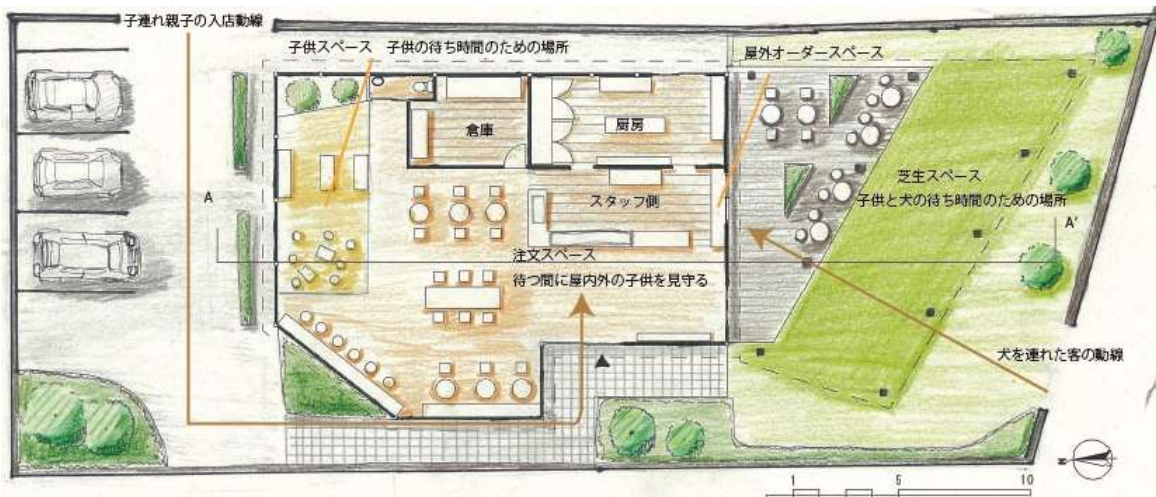


図 17 平面図

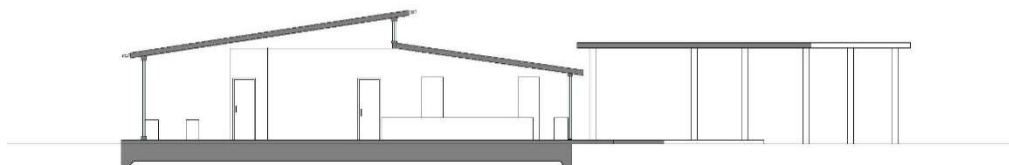


図 18 AA' 断面図

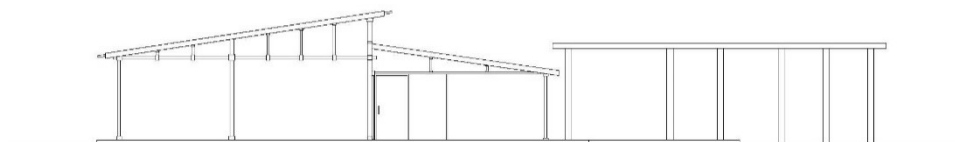


図 19 立面図

建物は全面をガラスで構成し、屋内外の境界を極力曖昧にした高い視認性により注文スペースや座席から屋外の芝生スペース、屋内のこどもスペースの双方を一望でき、注文前後での「待つ」時間に子供の居場所や様子を把握できる。

6 参考文献

Arch daily <https://www.archdaily.com/>